

おかやま
岡山の打ち首（上氏家町）

むかし、上氏家や、下司・鳥井を治めていた本保のどの様は、大へんわがままで自分の考えに従わない者には、きびしい罰を与えました。

この様の言うことを聞かなかった人は、とらえられ後ろ向きに馬に乗せられ、冬島から本保あたりまで引き回されました。そして、この様にさらうと、「こんなひどい目にあわずぞ。」と言つ見せしめのために、村人たちには仕事を休んで見るようにおふれを出しました。

きびしい罰をおそれた村人たちは仕事を休んで、岡山まで馬の後からぞろぞろとついて歩きました。そして、

「どんな悪いことをしたんかのう。」

「まだ若いのに、おつ母や子どももいるだらうのに。」
と、口々にささやきあいました。



岡山の中ほどにある谷には、ぐるりと柵をめぐらせた処刑場がありました。

とらえられた人は連れて行かれ、そこで打ち首にされました

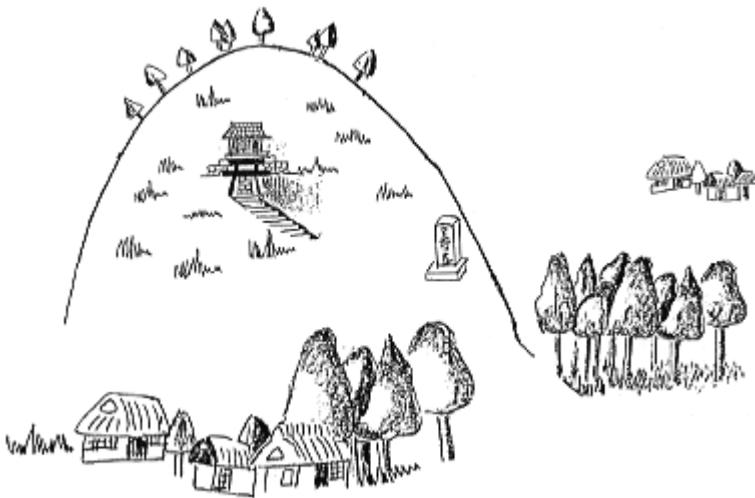
お仕置をされる前には新しいむしろ(わらであんだ敷物)に坐らせられ、高いお膳に三品のごちそうを並べて、食べるように言われましたが、だれも食べた人はなかったそうです。これから打ち首される者に、どんなごちそうを出されても、食べられるはずがありません。

きる役人も、この様のめいれいとはいえず平気な心でいられるはずがありませんでした。

そばに置いてある酒どっくりからがぶりと酒のみ、時がくると合図でさっと刀をふり上げました。かこいの柵につかまって見ていた村の人たちの間から、

「うおー」。

「わあー」。



とも聞こえるような悲鳴があがりました。

処刑場のそばに岡山神社があります。大正十五年四月、お宮さんに上棟式に花火をあげたところ火の粉が飛んで火事になり、近くの一軒が焼けました。

また、昭和五年のお祭りには、境内で芝居があり、村人が大勢見にきました。ところが、役者の一人がたおれて死んでしまいました。

そのときの芝居は、何とも言えない不気味なものだったと言われています。こんなことが続いたので、村の人々は、岡山神社の神様は女の神さまで、さわぐのをきらわれるとか、打ち首にされた人の霊がたるとかうわさをし、それからはお祭りさわぎの行事はしないことになりました。

処刑された人々の霊をとむらうために建てられた墓碑が山からおろされて、上氏家の真光寺に今も残っています。